

ポストコロナ（何を考えておくべきか） 読むこと考えることのススメ

徳島経済研究所技術顧問 工学博士

西池氏 裕

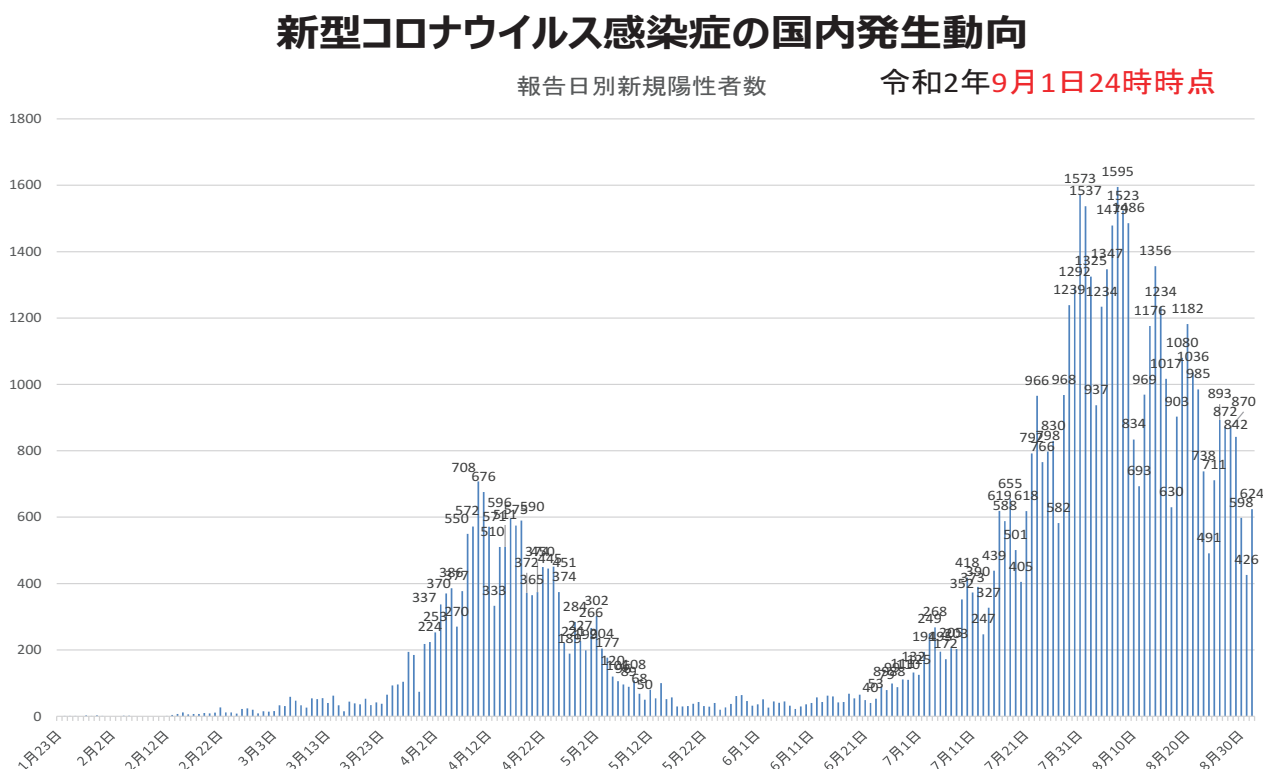
はじめに

昨年発生した新型コロナウイルス感染症（「COVID-19」が国際的な正式名称です）の脅威は、この稿が読まれるころまでに少しでも静まっているかどうか。コロナ騒動は世界経済に大打撃を与え、私達の生活を不安の雲で覆っております。感染の恐怖に怯えながらの生活、それに加えて記録的な猛暑です。いいかげんにしてくれといっても誰に向かっていえばいいのやら、まったくおかしくなりそうです。

図1、図2は新規と累積の感染者数です。日本では感染症発生以来二つのピークがあって、

これからどうなるのだろうというところが読み取れます。図1ではこのまま減少してくれと期待がわきますし、図2ではどこまで増えるのだろうと先行きへの恐怖が生じます。グラフというのは読み取るのはなかなか難しいものです。流行の初期にはこの種のグラフを見て皆が一喜一憂していて、TVなどのメディアでもしきりに報道していましたが、このごろはあまり見受けられません。視聴者の側でも注意を払う人が少なくなったような気がします。私自身を含め、人間危機的な状況も慣れると感受性が落ちるのかな、そんなことを考えました。いわゆるマンネリ化です。続けることはなかなか大

図1 新型コロナウイルス感染症の新規発生動向（厚生労働省 HP）



※1 都道府県から数日分まとめて国に報告された場合には、本来の報告日別に過去に遡って計上している。なお、重複事例の有無等の数値の精査を行っている。
 ※2 5月10日まで報告がなかった東京都の症例については、確定日に報告があったものとして追加した。

図2 新型コロナウイルス感染症の累積感染者数



変です。でも改めて気が付いたら大変なことになっていたということにならないためには大事なことです。そこでコロナ騒動の意味することを考えることで感受性をもう一度取り返してみようと思ったしだいです。

私が最も関心があるのは、このコロナ騒動が終息したとしても、「もう生活は元に戻りませんよ、新しい生活様式に変化してしまいます」よ、と為政者や識者がいっていることです。元に戻らないと云われても、私たちは困るだけで、何がどう変わるのかも実際のことが判りません。新しい生活様式というのは、在宅勤務の人が増えるということなのか、キャッシュレスの買い物に変わるということなのか、まさか「常にマスクをして、三密を避けなさい」が日常生活、というわけではありますまい。どう世の中が新しくなるかは置いておくとしても、パンデミック(ある感染症の世界的大流行、感染爆発とも訳される)は、生活様式や、生産・流通の在り方などにおける今までの歴史的な変化を加速してしまう作用があるようです。多くの識者もそう指摘しています。その変化が、人間社会にとって望ましい方向ばかりではないかもしれません。望ましい方向はさらに進め、おかしいと思う方向はなるべく阻止する、そうい

うことを考えるのは、今が最適な時期だと思います。パンデミックは社会の弱点をさらけ出します、だからドラスティックに考える機会を私たちは与えられているのです。

直近のマスメディアの論調には、コロナ対策をとるか経済対策が優先か、と二律背反的に論じられることが多くなりました。パンデミックを機に日本の社会がどのように変化するか、あるいはさせていかなければならないか、という腰を据えた議論があまりみられなくなりました。加えて直近の事で言えば、安倍総理が体調不良で辞任し、ここしばらくは目前の政局問題で、マスメディアの関心もそちらに向かうでしょう。

なんでも政府にまかせておけば大丈夫と言う超楽天的な人でなくとも、心のどこかには、私たちは自分と家族のことだけを考えていればいいのだという気持ちはあったかと思います。でも時代が変わる時や非常時の時には、自分や家族すら守っていけなくなるおそれがあることは歴史が示しています。また、今度のコロナ騒動では自分の事だけを考える人が他人に迷惑をかけて大きな感染源になってしまったりしました。コロナ感染者や医療従業者に対する差別問題で、自分たちのことだけでなく、人を思いやることの意味と大切さを私たちはいろいろ考えさせられております。

地域の行政が大きくクローズアップされたのもコロナ騒動を通じてかと思います。地域行政がもっともっと権限を持つべきであるというのは、コロナ騒動以前からの社会の必然的な動きではありました。それが今回の騒動でより鮮明になり加速されてきたのだということだと思います。

コロナ騒動は社会の動きを完全にストップさせたものではありません。むしろ目にみえないところで従来からの変化の動きが加速されたり、その準備が進められたりしているのです。こういう時代こそ私たち一人一人が世のありうべき姿をしっかりと見定めることが必要で

す。

現代、世の中の動きを知るには、様々なメディアがあります。しかし情報の氾濫といわれるように、何を選んでいいかわからない状況があります。なかには無い方がいいと思いたくなる質の低い情報すらあります。私は日常には新聞、じっくり考えるには本が最適だと思います。しかし活字離れがすすんでいるとはいえ、まだ本類は現実には選択に迷うほど出版されています。そこで、私がコロナ騒動の間に読んだ本の中で、これはお勧めできると思った本をネタにして、「今何を考えるべきかを考えた」ことを少し述べてみようと思います。

テーマは三つです。一つ目はコロナ騒動の最中である今とコロナの後を含めてどんなことを人々は考えているのかを知ることです。二つ目は感染症のことをよく知ることです。多くの人がよく感染症の事を理解しておけば、社会全体が誤った対策をとる確率が減少します。まずは自分の命、他人の命を守るために、感染症に関する歴史的事実を知っておかねばなりません。三つ目に感染症の発生の有無にかかわらずこの社会はどういう方向に動こうとしているのか、また動かすべきかの基本的な考えも持っておく方がよいのではないか、この三つです。

次にあげる三冊は今挙げた三つのテーマで読むべき本としてテーマごとにとりあえず一冊ずつあげました。

1冊目『コロナ後の世界を生きる』はいろいろな論者の主張を手早く読め、何を考えていくべきかを網羅してあるともいえます。その意味で最適の書でしょう。編者の村上陽一郎氏は科学思想史の研究者で各分野の24人の論者の小論文が載録されています。

2冊目『感染症の世界史』はパンデミックの歴史書では手軽であるし、比較的読みやすく大筋を理解するのに適しています。筆者の石弘之氏は新聞記者出身ですが、地球環境関係のエキスパートとして大学・国連などで要職を歴任した方です。

3冊目『現代社会はどこに向かうか』は社会学者見田宗介氏の2018年の著作です。新型コロナウイルスのことなど日本人はたぶん誰一人として意識になかった頃に書かれています。数多くの識者が論じ山のようにある人間社会の現状と未来を論じた著作の中で、この書は私が以前からよく読んでいた著者によるものであり、これさえ読めば問題が網羅されるという類の著書ではありません。切り口も独特なところがあります。しかし、私は現代を本質的なところで大づかみに認識し、未来への糸口を探している人には、なんらかの指針を与える書だと思います。今の時点で、ポストコロナへの考えの基本的足掛かりとするにはお勧めできます。

1. 村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる』の勧め

第1のテーマは「コロナ騒動の最中である今とコロナ後を含めてどんなことを人々は考えているか」です。

この本の「はしがき」には【今私たちは、未経験な状態のなかで、暗中模索している。しかし、ことは、今、この災禍をどう乗り越えるか、というところに留まらない。この災禍をどのように乗り越えたとしても、その次にやってくる社会は、今までとは違ったものにならざるを得ないだろう。その社会を、少なくともこれまでのそれよりも、少しでも望ましいものにしていくためには、今私たちが実行している乗り越え方が、大きな意味を担っているはずである。その自覚の下で、私たちが、ベストな解決策でなくとも、ベターな解決策を実行するために、何が必要か。】と編者である村上陽一郎氏は呼びかけています。彼は科学思想史や科学哲学の研究者で私もときおりその著作を読ませていただくことがあります。実に科学的な思考を大事にする人で、その主張することは傾聴するに値します。日本は今までもスペイン風邪を含めてパンデミックを幾度も経験してきたのですが、国

全体の問題として受けとめたのは、たぶん今回が初めてではないでしょうか。加えて、「はじめに」にも申し上げましたように、多くの識者が今発言する理由はポストコロナで来たるべき社会を、【少しでも望ましいものにしていくためには、今私たちが実行している乗り越え方が、大きな意味を担っているはずである。】ということだと思います。

掲載された24の小論は4つの部に分かれています。

- I. 危機の時代を見据える
- II. パンデミックに向き合う
- III. コロナ禍と日本社会
- IV. コロナ禍のその先へ

中でも記憶に残った、いくつかの小論文を紹介してコメントを加えておきたいと思います。

(1) 「時間の災害」、「社会の変化をくみとる」

ロバートキャンベル氏の『「ウィズ」から捉える世界』では大きく二つの指摘が頭に残りました。

一つは【疫病は瞬時に流れを堰き止め、壊し、世界を荒涼とした景色に激変させるものではない。その代りに、ものごと、やがて自分の何かをも元へ戻れない形へと変質させてしまう。新型コロナウイルスの感染拡大は、時間の災害なのだと感じています。】と述べていることです。疫病は瞬時に流れを堰き止めたり壊すものではないと言われても、現実自身や身寄りに感染者が出たり、ロックダウン(都市封鎖)^(※1)をされたり、あるいは営業ができなくなった店主にとっては瞬時に世界が暗転したに違いありません。この文で指摘しているのは、むしろ一般の眼にみえない感染症の原因に情報だけで振り回されていると感じながらも、不安も感じている多くの人々を指すのだと思います。たしかに私も含めてそういう人々には世の中はなんら変わったこともなさそうなのに、規制ばかりされて、という具合に感じるでしょう。でもがまんしていれば

規制もなくなるさ、と考えているかもしれません。最も興味あるのは「時間の災害」という言葉です。うっかり読むと、ここでいう「時間の災害」を時間限定の災害と、理解してしまう可能性があります。でもそれは誤りです。自分の命を時間の流れとして感じることができ、それが自分の周囲の空間が変わったり自分に何か起こったわけでもないのに流れたり堰き止められたりしているとキャンベル氏は感じたそうです。文脈から見るとその意味で「時間の災害」といったのだと思われます。しかし私自身は、この「時間の災害」という言葉の意味を、もう少し別にとります。つまり、コロナ災害は今までの世の中の変化の速度を無理やり加速する、そのことを指しているのではないかと理解します。ITなど現代の技術の変化は、生活の様式、経済のシステムまでもどんどん変化させています。変化はただでさえ速く、それによって従来の生活様式や社会のしくみが変化していくのはやむを得ません。実際にはその変化にあわせて個々の人間もしだいに生活が変化していきます。時代の流れには逆らえないと人々が呼ぶ現象です。しかし、その変化は急速になればなるほど歪みは大きくなり、その犠牲を強いられる階層や世代の人が多くなります。感染症は世の中の変化を加速させることは識者も指摘しています。つまり、変化に要する時間が短縮することで起きる

(※1)ロックダウン(都市封鎖)は人によって定義が異なっているので注意を要します。政府はロックダウンとは「強制的に罰則を伴う都市の閉鎖」という表現で定義しています。新型コロナウイルスも適用対象とする政令が出された感染症法第33条でロックダウンが可能かどうかという議論もなされています。また33条にどれほど効果があるのかなどという議論すらあります。

感染症法の第33条というのは(交通の制限又は遮断)に関する条項です。参考に記しておきます。

(第三十三条 都道府県知事は、一類感染症のまん延を防止するため緊急の必要があると認める場合であつて、消毒により難しいときは、政令で定める基準に従い、七十二時間以内の期間を定めて、当該感染症の患者がいる場所その他当該感染症の病原体に汚染され、又は汚染された疑いがある場所の交通を制限し、又は遮断することができる。)

「災害」を「時間の災害」と呼ぶべきではないか。そのように思うわけです。

もちろん社会変化そのものが全面的に悪であるわけではありません。新しい生活様式の変化は新たな社会の発展の機会を提供してくれます。そのことをキャンベル氏は次のように述べています。

【新しい生活様式は、私たちの感性を変え、日々の行動パターンも変えていくでしょう。らせん階段を上るようにして、私たちは色々な角度から新たな景色を迎えるはずです。社会の変化をくみ取り、新たなビジネスを世界に打ち出すチャンスかもしれません。若い人にはアイデアがあるし、わたくしの知る限り、もう考え始めている人もいます。】

この考え方は卑俗な言葉でいえばピンチをチャンスへと同じかもしれません。でもそれは、単に予期せざる事態がもたらしたピンチなのではありません、その予期せざる事態が無くても進行していた時代変化が、加速的に生じている事態なのだと認識してもいいのではないのでしょうか。

(2)「今の世界をどう変えるか」が大事

1982年からドイツで暮らす小説家の多和田葉子氏の『ドイツの事情』もおおいに刺激されました。氏は日常ドイツで暮らしているのでパンデミックの状況の中で各国政府がどのような対策をとっているかが、良いニュースも悪いニュースも含め日本とは異なる選択で、しかも多く入るようです。その中で外国の人の眼からの日本の位置付けも分かるわけです。やはりそうだろうなあと考えたことは、日本のコロナに関する話題は、オリンピックを延期したことと、マスクが二枚ずつ配られたが不良品であった、というくらいで、ほとんど日本政府のコロナ政策に関しては判らないということだそうです。もっとも、私は外国の人から「日本では感染者数が少ないそうだが、政府が検査させないからだって。」と聞かれたことがあります。これも外

国の人が興味を持った政府の方針の一つです。外国の人々は想像以上に他国の情報を自国のメディアから受け取っています。それに比較すると日本のメディアは国際情報が弱いと昔から言われているのは事実で、今もそのように感じます。

多和田氏によると、ドイツでは【メルケル首相が科学者の意見に耳を傾けて政策を決め、その際、どの科学者がどういう見解を出したか、それがどのような政策につながったかなど、手の内をすべて見せる。】そうです。ひるがえって日本では、どうでしょう。＜新型コロナウイルス対策を話し合う政府の専門家会議について、菅官房長官は、発言者や発言内容をすべて記録した議事録を作成していないことを明らかにしたうえで、行政文書の管理に関するガイドラインに沿って適切に対応しているという認識を示しました。＞というNHKの5月29日の報道を知った時私は唖然としました。こんな大事なことに記録も残してないし、誰の意見かすらわからないのです。今の政府関係者はまるで国民を信頼していないようです。このごろ各自治体の首長がコロナ問題で直接住民に訴える姿が好評を得ているようです。この本でも政治学者の御厨貴氏は『コロナが日本政治になげかけたもの』の中で「知事たちの目覚ましい活躍」という箇所、小池東京都知事、吉村大阪府知事、鈴木北海道知事の三人の名前をあげながら、住民に語り掛ける姿勢を評価していました。さらに、それに刺激されてか、他の知事もがんばるようになって、勝ち組と負け組にはっきりと分かれるようになってきたことを述べています。中央政府への一極集中体制から地域への権力分散は、時代の流れていくべき方向だと思いますが、こういうところにも日本の政治システム全体の姿が顕になってきているのだと思います。

【パンデミックによって世界が変わったというよりも、把握しやすくなった今の世界をどう変えるかが大事。】という多和田葉子氏の言葉には頷けるものがあります。

(3) 感染症と向かい合う前線からの声

この本の中で「Ⅲ. コロナ禍と日本社会」に載録されている小論文は様々な職場からの声が反映されていて興味深いものです。

社会政策学者の阿部彩氏は『緊急事態と平時で異なる対応するのはやめよ』と題した小論で、コロナの影響で人々の生活困難がマスコミにとりあげられ種々の施策を施されたことはいいことなのですが、もやもやしたのを感じたことを訴えています。三月中旬に、コロナの影響で公共料金等を支払えなくなった人への支援を政府が要請しました。それに関し氏は次のように述べています。

【しかしながら、私は、「ライフラインを止めてはならない」と熱弁する政治家や、仕事が減ったひとり親家庭の母親を心配顔で取材するニュース・キャスターをみて、心の奥がモヤモヤとする何とも言えない不快感を覚えた。何故なら、これまで、もう何年も、政治家の方々や、一般市民、マスコミに対して、公共料金や家賃に対する支援策が必要だと訴えてきたが、何の反応も得られなかったからである。それが、あたかも「大問題だ」と語られているのを見て、私の正直なリアクションは「えっ、それ、あなたたちが言う？」であった。】

まことに、半分同調しながら、半分自分が責められているような複雑な思いのする意見です。だが、これもコロナが事象を把握しやすくしたためかもしれません。実は、この小論文の鋭いと思ったのは、「平時の困窮と緊急時の困窮は、何が違うのか」という考察です。一つには「期間限定」の困窮であれば税金を投じたり、自身が支援を行う気になるが、長期化すれば人々の気持ちは変化するだろうという人間の心、二つ目には「困窮」の原因をどう考えるか、感染は不可抗力だから支援すべし、普段の困窮は自己責任で同情の余地はないと考えやすいこと、三つ目には人々は緊急事態には高揚感があるためにリアクションが変わるということ、を氏が指摘しています。

もう一つの氏の意見の鋭い所は、緊急時の compassion（思いやり）の高まりは、困窮の長期化をどうするかとか、困窮の要因が不可抗力か自己責任かといった議論に向き合わず迂回してしまう、したがって延長線上に「平時」の困窮に対する解決策はない、という指摘です。このことはまた、憲法の国民の権利「健康で文化的な最低限度の生活」や、生活保護法の「無差別平等」の原理が現在如何なる状況に置かれているかを顕にしています。

全編紹介できないので割愛しますが、訪問看護師秋山正子氏の『訪問看護と相談の現場から』は、訪問看護にコロナが及ぼした影響などがリアルに語られているのも読みごたえがあります。

(4) ハコからの脱却

建築家の隈研吾氏は『コロナの後の都市と建築』で魅惑的な意見を述べています。視点はさすがと思わせます。コロナの経験を踏まえてどのような都市を今後作るべきか、という提案なのですが、これも時代として進むべき方向が、コロナ禍があったから加速されたともとれます。「ハコからの脱却」がキーワードとなる人間を解放していくためのコンセプトの提案だと思います。「20世紀には超高層ビルに代表されるように、人はハコに詰められて仕事をする方が合理的で効率が良いとされてきたが、今やそこから脱却していくべきだ」、という考えです。私流にいいかえれば近代合理主義が行き着いたところが高層ビルの思想であり、そこから脱却するのが未来の生活のあるべき姿ということなのでしょう。

「ハコからの脱却」のコンセプトは都市計画にも話は当然及びます。隈氏は「ハコ」からの脱却は室内からの脱却ということ、つまり外を歩くことだと述べます。またその説を展開する中で人間と人間との距離についての文化人類学者エドワード・ホールを考え方を紹介していますが、

これはこのごろ普及した言葉、ソーシャルディスタンスの考察でもあるのでなかなか面白いです。最も目から鱗が落ちたのはコンパクトシティやスマートシティにはハコ自体を解体しようとする意識が希薄であると喝破していることです。私などはムムムと唸ってしまいました。

この8月31日に徳島そごうは閉店されました。記念セール、もしくは名残をおしみにいくためでしょうか、三密もなんのその連日の大入り満員だったと聞きました。徳島新聞には社説で徳島市の顔がなくなったと書いてありました。ポストそごう、いやポストコロナの徳島の街はどのようなたたずまいになるのでしょうか。社説には、徳島市にはずいぶん昔からの都市計画はあるのだが遅々として進んでいないことが述べてありました。はたして、徳島には未来を見据えたフィロソフィのある都市計画があるといえるのでしょうか。

(5)「利他主義にもとづく連帯を」

小論文『新型コロナウイルスとの共存——感染症に強い社会へ』の著者、高山義浩医師のことはダイヤモンドプリンセス号防疫体制との関連で名前を記憶されている方も多いかもかもしれません。現在は沖縄県立中部病院の感染症内科・地域ケア科の副部長を務めておられます。東京大学医学部保健学科卒業後は、世界の貧困や紛争などを取材するフリーライターとして世界を飛び回っていたので見識の広い方と思われ、今回の論文も、そのあたりの経験を踏まえたものだと思います。

感染症関連では高山氏の意見は傾聴に値します。しかし、新型コロナウイルスとの「共存」という言葉はややもすると、はやとちりの誤解を生みやすい言葉ですし、かなりそうになっているところもあります。感染症への対応方法としての「集団免疫戦略」との違いも差異が明確でないような気がします。多くの人は新型コロナウイルスへどのように対応していくのかということをも明確に戦略として理解しているわけではない

でしょう。高山氏の『新型コロナウイルスとの共存——感染症に強い社会へ』という小論文における各節の見出しを並べてみます。

＜持ち込まれる感染症＞

＜麻疹が人類に行き渡るまで＞

＜小児の初感染と集団免疫＞

＜感染症と共存しつつ制御する＞

＜ワクチンに期待しすぎないこと＞

＜利他主義に基づく連帯を築く＞

と続き、最後に＜感染症に強い社会へと成長する＞という内容になっています。最初の三つの節に簡単な今までの感染症麻疹との対応の歴史が述べられます。これはこの後の『感染症の世界史』のところでも述べることになりますが、実際に感染症の歴史の最低限の知識がなければ、現状の対策の深い意味を理解することはできないであろうと、私はつくづく思いました。＜感染症と共存しつつ制御する＞という言葉聞いた時、どこかの大統領が全員感染して免疫を早くつけるべきだと感染対策をおろそかにしたという、うわさを思い出したりしました。共存とは難しい概念です。

今後を見通すための重要なポイントとして高山氏は次のように述べています。

一つには、【世界のほとんどの国が新型コロナウイルスの封じ込めを諦め、このウイルスと共存する道を選択した。】

二つには、【日本政府もまた、国内における感染の拡大を防止すること、オーバーシュートと呼ばれる爆発的拡大を防止することを基本方針とした。】

ということです。つまり「地域で新型コロナを発生させない」ではなく「地域で発生することはあるが広げない」を目標としていることです。日本のコロナ戦略はこれだということです。そういう眼でみていかねばよく事態の推移を理解できないということなのでしょう。

高山氏は「利他主義にもとづく連帯」を提唱しています。「利他主義にもとづく連帯」というのは、一般的な災害の時にでも通じるような言葉

ですが、高山氏は次のように説きます。【感染症から社会を守るため、私たちは、利他主義に基づく連帯を築いておく必要がある。そうした準備を果たすことなく、ワクチンの優先順位を決定したり、治療薬の奪い合いを始めてしまうと、分断と憎悪の引き金をひくことにもなりかねない。その意味で、残された時間は限られている。】

実際に現在の世界の潮流は一国主義など、利他主義とは反対の方向へ動いている感じがします。そのこともあるせいでしょうか、高山氏は、【政治そのものへの信頼が不可欠だ。】と、説いています。

高山氏の論文には触れていませんが、スウェーデンのコロナ対策について少し述べておいた方がよいと思います。やはり私には、ウイルスとの「共存」という言葉が意味する内実が気になるからです。

ご存じの方も多いと思いますが、スウェーデンのコロナ対策はロックダウンを実施しなかったことで世の注目をあびています。トランプ大統領はじめ世界の国々からの批判は強かったようです。でもスウェーデンでは、ロックダウンは行わなくてもソーシャルディスタンスの確保や大規模集会の停止などは守られたと聞き及びます。政府自体は集団免疫戦略と呼び方に反対しています。

確かに、スウェーデンの死者数は8月11日時点で5,766人、100万人あたり570人を超え。この比率は日本の8.3人をはるかに超え、他の北欧諸国との比較でも高いので批判されたのでしょう。欧州ではベルギー、英国、スペイン、イタリアに次ぎます。でもスウェーデンに通じている識者の主張を読むと、死者の多い理由は介護システムの問題が大きいと聞きます。死者の9割は70歳以上、その5割が介護施設に居住という統計があるそうです。感染防止対策が不十分な時に、パートタイムの介護人が多く大量にクラスターが発生したといえます。それならロックダウンのせいではなく、もともとの構造

的問題だということのようです。真偽のほどはわかりませんが、その後の死亡者数の推移を図3でみると、頷けるところがあります。死亡者は一直線に減少、第二波の感染拡大も現れていません。

図3 スウェーデンの日毎の死亡者数推移



※公衆衛生庁ホームページより改変

WEB上で見ることで『政治経済2020/08/19』に日本人で現地に在住する医師宮川絢子氏の『何故スウェーデンはロックダウンしなかったのか』という証言がありましたので、紹介します。まずロックダウンしない選択が実験のような言い方はおかしいと言います。

【このパンデミックで感染対策の指揮を取るスウェーデンの国家疫学者、テグネル氏は、ロックダウンにははっきりとした学術的エビデンスがないとした。そうであるとすれば、スウェーデンの政策が「壮大な社会実験」と呼ばれるのは不本意である。今までに経験したことのない今回のパンデミックにおいて、ロックダウンすることも、ロックダウンをしないことも、どちらもある意味で社会実験であると言えるのかもしれない。】ここには、誰の見解であったかが公にも明確にされています。続いて【ロックダウンという治療には、感染拡大抑制という効果と同時に、看過できない副作用がある。スウェーデンの専門家グループは、効果と副作用のバランスを考慮して「ロックダウンには、副作用こそあれ大きな効果はない」とした。】として、経済的にも国民の精神衛生上のにも長期間の継続は難しいとしています。また国民の移動上の自由を保証する憲法上の縛りも大きな理由であることを述べています。しかし実際には日常生活にはある程度の束縛がなされ、国民はそれに従っています。

スウェーデンで現在までの政策が継続されて

いる理由として翁百合氏(日本総合研究所理事長／NIRA 総合研究開発機構理事)もWEB上で次のように解説しています。

第1に、専門家の考えを尊重する憲法上の仕組みがあること

第2に、国民の政府に対する信頼があること

第3に、自主性を尊重する国民性が底流にあること

殆どの論者が異口同音のように国民の政府に対する信頼を述べるのは日本の現状をみれば、余計になるほどと思わざるを得ません。

この村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる』には多くの識者がそれぞれ経験を踏まえたしっかりした意見を述べておられます。それらの意見をきっかけに自分からいろいろと考えを展開するきっかけにもなります。是非参考文献としてお勧めします。

2. 石弘之『感染症の世界史』の勧め

第2のテーマは「感染症のことをよく知ること」です。

前章でも指摘しましたが、多くの識者が現状生じているパンデミックの歴史を学ぶことは次の時代への対応を考える土台となる事だと勧めています。この書は広く人類の歴史が感染症と如何なる関わり合いを持っていたかを説明してくれます。著者の石弘之氏は環境問題の研究者です。1940年生まれで、朝日新聞編集委員を経てから東京大学教授、駐ザンビア特命全権大使、国連環境計画上級顧問、国連開発計画上級顧問、持続可能な開発のための日本評議会議長等々を歴任してこられました。その発言には広い視野と経験、洞察の裏打ちを感じます。

まず冒頭、気になり脳裏にやきついた言葉があります。【私たちは、過去に繰り返されてきた感染症の大流行から生き残った、「幸運な先祖」

の子孫である。】という言葉であり、続けて述べられる【私たちが忘れていたのは、感染症の原因となる微生物も、四〇億年前からずっと途切れることなくつづいてきた「幸運な先祖」の子孫ということだ。人間が免疫力を高め、防疫体制を強化すれば、微生物もそれに対抗する手段を身につけてきた。】という言葉です。私は当初、そうか人類はこういう微生物もいっしょに地球の仲間として共存してきたのだな、ありうるよな、くらいの軽い意味で感心しました。

ここでいう微生物は当然ウイルスのことも入っていると思ってよいわけです。「共存」という言葉が意味しているのは、ウイルスが生物であるかどうかは別として、地球上に常に共存していた存在である、という静的な感じです。だが実はその共存してきた歴史的事実を著者は「共進化」といいます。上にのべたように、最初私はいわば当然のことを述べただけのように、強い関心をその言葉に示すことができませんでした。だが、中に書かれていたのは、共存の歴史は「共存」という言葉から受ける美しいイメージとは全く異なったものでした。おもわず天を仰ぎながら、ムムムと唸ってしまったのです。

かつて人間は天然痘を根絶しました。またポリオを退治したと思ったこともあります。しかし歴史が示すところは、天然痘が終わればエイズ、インフルエンザ、エボラ出血熱、e t c、次々と病原体は新たな形で出現し、そのたびに病原体との戦いを続けなければならない、それが今もって継続しているということです。壮絶な人間と病原体の生存をかけた争いの歴史なのです。お互いを尊重して「平和」に共存をすると云うような美しいイメージではないことを歴史は語っています。無論どこかの国の指導者がいったようにウイルスとの戦争と呼ぶことは、避けるべきでしょう。しかしそれは自然界の掟、生物が生存をかけて日々行っている争いの歴史であることは間違いのないのです。

この『感染症の世界史』の前書きが書かれた時は2017年、新型コロナウイルス感染症の流行前です。したがって今回のパンデミックの記述はありません。我々自身がこの本の文脈で、今回のパンデミックをどのように位置づけて書くべきであろうかを考えることもまた、大事なことです。この本の構成はそれを誘う様にもなっていることを感じます。

簡単に全体を紹介しましょう。序章・終章と三部とで構成されています。

- 序章 エボラ出血熱とデング熱——突発的流行の衝撃
- 第一部 二〇万年の地球環境史と感染症
- 第二部 人類と共存するウイルスと細菌
- 第三部 日本列島史と感染症の現状
- 終章 今後、感染症との激戦が予想される地域は？

○「共存」・「共生」、そして「共進化」という複雑さ

第一部では、人類の発生以来からの、まさに二〇万年の感染症「微生物」との「共存」の歴史が語られます。人類の移動に伴って感染症の原因である「微生物」が移動した長い旅路の大ドラマです。現代の人類はアフリカ辺りで「生まれ」、そこから広がり移動するとともに人類の予期していない随伴者たち(小動物、膨大な細菌、ウイルス、原虫、微生物等々)も移動しました。また環境が変わるごとに人類はそれに適応させるべく肉体を進化させましたがやはり人体に棲みついたウイルス等も自らを進化させていきました。

通常多くの人はウイルスを根絶させるべき人類の敵と思っています。しかしウイルスは自分の遺伝子を別の生物の遺伝子に組み込むことでその生物の進化を促す機能を持っているらしいのです。つまり生物は感染したウイルスの遺伝情報を自らの遺伝情報に組み込むことで進化を促進させてきたというから、どうやら、ウイルスは生命の本質的部分を握っているようです。

胎盤に住むあるウイルスは細胞の膜を作り胎児を守る役割を果たすというから驚きではありませんか。これこそ「共生」と呼ぶべきなのかもしれません。

だが、どうも、平和裡に「共生」だけしていただいいわけではないというところが、この宇宙の不思議で残酷なところ。ウイルス等の中には感染した宿主である人間の存在に悪影響を及ぼす不埒なやつが存在して、いわゆる感染症を引き起こし、結果、おこりうるケースは四つあるそうです。

1. 宿主の死滅で終わる場合：ラッサ熱やエボラ出血熱がそうでした。
2. 感染する微生物の絶滅：天然痘は唯一の根絶された感染症だそうです。
3. 宿主の体内での共生：通常免疫機能で抑えられている常在菌で「日和見菌」と言われるそうです。
4. 宿主に潜み時おり発症させる潜伏：水痘ウイルスのように果てしない戦いをしている場合もあるようです。

「共生」しつつも、人類も病原体も進化しながら、複雑な永遠の戦いを続けているということ。をわれわれは深く認識すべきようです。

○環境変化が招く感染症

移住や、農業などの環境変化が広がったというマラリヤや吸血吸虫の感染の話も驚きました。マラリヤの話は蚊が媒介するとか、日本の「おこり」がそれであるとか、話を聞く機会が多いのですが、吸血吸虫の話は知っている人が少ないのではないのでしょうか。ツタンカーメンもナポレオンも感染者で、エジプトが農耕社会を作り上げたころから連綿として生き残っていて、アスワンハイダムの建設とともに普及した灌漑水路で増殖した巻貝をとおり爆発的に感染が拡大したといいます。日本では弥生時代に稲作とともに持ち込まれた日本吸血吸虫は2000年までには撲滅されたようですが、中国などでは発生が続いています。

人類の移動も含め環境変化がもたらした、ペストなど歴史的な感染症の流行の例証は興味深いを通り越し、戦慄を覚えます。

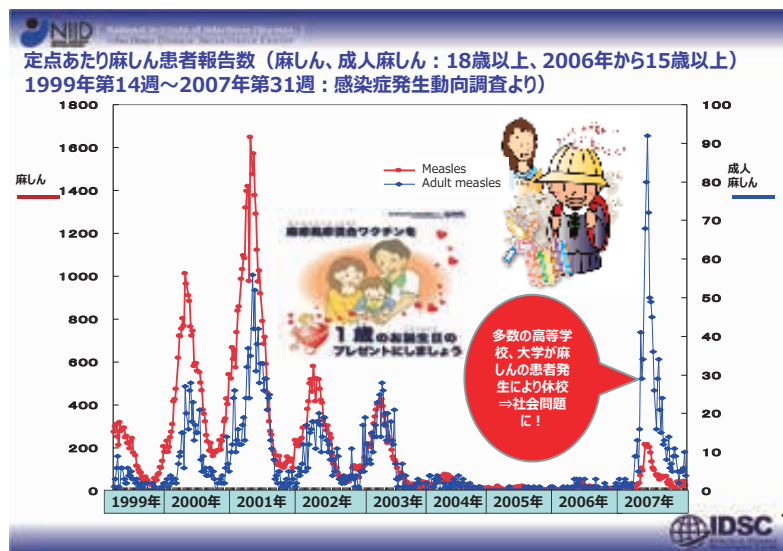
図4 中世ヨーロッパの医者が着用したベストの「防護服」(作者不詳)



○日本はどうか

日本の感染史とその特徴を知っておくことは現在のパンデミック・コロナ禍に対応していくためにも有用な情報を提供してくれるはずです。詳細は原書をみていただくとしても要点を紹介してコメントを付しておこうと思います。

図5 ハシカ(麻疹)の日本における流行



(1) ハシカ(麻疹) 後進国ということ

日本では「ハシカと恋の病はなんとやら」といわれたように、かかるのが当然のごとき病気として軽く見られてきたようです。ワクチン接種率は後進国並みに低かったし、国内からの排除宣言が出されたのが2013年9月で他の先進国より10年以上遅れました。そのため日本からの渡航者がよく海外にハシカを持ち出し、渡航先で感染させた記録が残っています。感染能力が高いわりに死亡率が0.1 から0.2%と比較的低いのが軽視された原因ではないかと言うことだそうです。2000年当時のWHOの「世界における麻疹の排除状況」を見ると、3段階に世界の国がわけてあり、我が国は制圧期、つまり最も遅れた国に分類されているから、不名誉なことです。

予防ワクチン接種が始まったのは1966年で、1978年に定期接種になり、劇的にハシカ発症数は減少しました。それがあの三種混合の「MMRワクチン」に切り替わったのが1988年です。まだ記憶に新しい人も多いと思いますが、三種というのはハシカ、おたふく風邪、風疹で、この混合ワクチンの副作用で1993年までに1,682人が無菌性髄膜炎を発症しました。それで副作用の原因となったおたふく風邪用ワクチンを除く接種に切りかわりましたが、親御さんへ与えた恐怖心によって、接種率は急激に下がったので

す。その後2000年から2001年に全国20万から30万人におよぶと推定される大発症があり、世界に衝撃を与えました。それ以後「一歳の誕生日を迎えたらワクチン接種を」キャンペーン等で確実に減少しましたが、根絶されたわけではなく、その後も2007年には高校・大学を中心に流行、休校がいくつか社会的にも大問題となりました。図5は麻疹の感染者の動向を示しています。この辺りの事情は『感染症の世界史』にはあまり詳しくないので、もっと詳しく知る

には国立感染症研究所(I D S C)等、他の資料にあたと良いと思います。

『感染の世界史』は日本に関して、1960年代に世界的流行を起こし、2012年に妊娠世代を震え上がらせた風疹のこと、日本人に多い「成人T細胞白血病」のことなど忘れてはならない感染症の流行の経験について語られていますからとても参考になります。

この本を読んでいて、感染症の対策は非常にむずかしいということがよく解ります。だが、それでも、医療行政がもう少ししっかりしていたら、人々がもっと科学的な根拠をもとに冷静な判断をしていたら、またマスメディアも興味本位でセンセーショナルな情報だけでなく、質の高い専門家の意見を報道するようにすべきだ、ということを感じます。でもやはり、一人一人の人が科学を信じて冷静に対処していくことがより必要だということも解ります。特に今のコロナ感染の問題があるからなおさらです。

この本を読んで得られた重要なことは、「人間社会が感染症の流行が生じるような環境を作ってきたこと」、「特に近代化において都市にすべてが集中したこと」、および「今後高齢化等でウイルスとの「共生」や「共進化」のバランスが崩れたらますます危険性は高まるだろうこと」だと考えています。人口の集中と高齢化、自然環境の破壊、それらの課題に対して、パンデミックの経験をどう活かすかが今問われているのだと思います。

3. 見田宗介氏『現代社会はどこに向かうか』の勧め

第3のテーマは「感染症の発生の有無にかかわらずこの社会はどういう方向に動こうとしているのか、また動かすべきかの基本的な考え」を考えることです。

「日本はどのように変わろうとしているか」、はコロナ以前とコロナ後で基本的には変わらないと思います。ただコロナ対策を踏まえたうえ

でその変化の速度が大きく変わるのだと思います。もしこの何らかの変化の方向が起こるとしても、良い方向で変化は生じなければならないと思います。

それはともかく、日本の社会はどのように変化していくのでしょうか。コロナでその方向が変化するかしないかという問題はあるとしても、コロナ騒動がない時はどのように考えられていたかは重要なことだと思います。それらのことを述べた本もずいぶんとたくさんあります。

○テクノロジーと進化

実は第3のテーマでは一冊余計に紹介したいと思います。落合陽一氏の『日本進化論』です。落合氏はまだ若い気鋭のマスメディアによく登場する評論家(本人はメディアアーティストと称しているようです)なので、どのような発想をしているのか興味あるところです。若い評論家の視点は大事ですのであえて一冊余計に採り上げました。

『日本進化論』は落合陽一氏の興味にしたがって章ごとにタイトルが付いています。それを挙げてみましょう。次のようになります。

- はじめに ポリテックとは何か
- 序章 テクノロジーと日本の課題を探る
- 第1章 「働く」ことへの価値観を変えよう
- 第2章 超高齢社会をテクノロジーで解決する
- 第3章 孤立化した子育てから脱却するために
- 第4章 いまの教育は、生きていくために大事なことを教えているか？
- 第5章 本当に、日本の財源は足りないのか
- 第6章 人生100年時代の「スポーツ」の役割とは？

「ポリテック」とは耳に新しい言葉ですが、要は「テクノロジーをいかに活用するか」に重点をおいた政策ということで、この本の重要なキーワードになっています。日本ではI o Tを中心とした政策などが諸外国に後れを取っていることから主張された考えです。思想自体は技術革新が社会改革の駆動力になってきたと考えている私などはすんなり普通に納得できる思想です。そして現在進行中のI Tによる技術革新が当然大きく眼前にあるわけですから、落合氏の興味は「限界費用(再生産にかかるコスト)」ゼロ化の課題ということになり、日本の課題という章で述べられることになります。ソフトウェアの再生産のためのコストは限りなくゼロに近づくことは現代以降の生産活動の大きな特徴であり、経済的にも結構新鮮で面白い課題だと思っています。また「働くことの価値観」に触れたことも極めて今日的課題であるし、特に第2章の「超高齢社会をテクノロジーで解決する」は焦眉の課題でもあるわけです。特にコロナ騒動で人の接触が制限されている時に、スマホやPCなどを持たない、あるいは操作できない高齢者は、ある意味では情報差別を受けていることになりますし、孤立化に近づくことにもなるわけです。この課題はコロナ騒動で急速に加速されました、至急自治体が何らかの手を打つ必要があると私は思います。

他の章も含めて現状の課題を知るためには一読に値する本です。

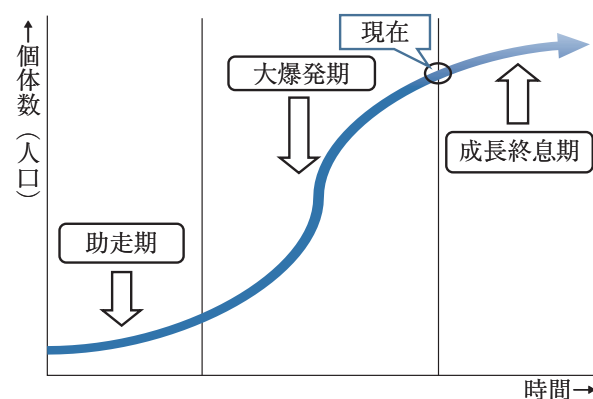
○脱高度成長期の精神変容

ただ今回一冊を推薦するならば、見田宗介氏の『現代社会はどこに向かうか』です。目前の技術革新の動向が社会に与える影響を知ることも大切ですが、コロナで家にこもる機会に少し人間のものの考え方を歴史の中で眺めてみることも必要かと思うからです。そのような観点ではよりドラスティックに歴史の流れ、人の精神の変化を考察したこの本を推薦します。内容は目次に即すると次のようになります。

はじめに	
序章	現代社会はどこに向かうか
一章	脱高度成長期の精神変容——近代の矛盾の(解凍)
二章	ヨーロッパとアメリカの青年の変化
三章	ダニエルの問いの円環——歴史の二つの曲がり角
四章	生きるリアリティの解体と再生
五章	ロジスティック曲線について
六章	高原の見晴らしを切り開くこと
補章	世界を変える二つの方法
あとがき	

序章に全体の骨子が述べられています。その中で、NHK放送文化研究所の世代間の意識調査にもとづく研究結果が興味深く、見田氏のこの課題に対するモチベーションにも相当します。詳細は意識調査結果をみていただくとして、見田氏は1970年代に存在したような世代間格差は1980年代には著しく減少、その後さらに減少していくというものです。これは人類がロジスティック(L)曲線の飽和期に近づいているからだという認識に基づいて解釈しています。L曲線は生物の個体数変化などを現す数理モデルですが、経済的な変量を現すのにも良く応用されます。見田氏は日本も含めて人類社会が「近代」という爆発期を後に、現在は変化の小さい成

図6 ロジスティック(L)曲線 生物の個体数変化の数理モデル



長終息期の時代に向かっているという大きな歴史観を有しているのでしょう。

見田氏の考えの最も鋭い所は第一章の「脱高度成長期の精神変容——近代の矛盾の(解凍)」で示されていると思います。

近代というのは、西洋史的枠組み(それが現代の世界標準ですが)で市民社会ができて経済革命を経て資本主義が成立する時代です。資本主義を可能にしたのは人間の都市への集中もさることながら商業資本主義的な富の蓄積と共に産業革命という技術の革新があったことで、それらの要素がお互いに増幅し合いながら爆発的な人口や生産の増大があったわけです。ところがその成長は永遠に続くわけではなく、そろそろ頭打ちではないかという認識を見田氏はL曲線を持ち出して説明するわけです。でもそのこと自体は様々な論者が述べている、いわば珍しくない説です。見田氏の見解で面白いのは近代主義を支えて来たのは合理主義であったから、脱高度成長期には合理主義万能の時代ではなくなるという指摘です。その上で、見田氏はこの書で、私たちに宿題を投げかけます。中世の精神の非合理性を否定して近代の合理性が定着したのであれば、脱高度成長期の精神的傾向は合理でも非合理でもない「メタ合理性」ではないのか、と。面白い仮説だと思います。コロナが世の中の進行速度を速めるのなら、私たちは今のうちに考えておく必要があります。

考えるヒントが少しだけコロナの中にあります

す。私たちが今までのような経済的合理性だけを考えていてはコロナ感染を防ぐことはできません。またコロナ感染防止だけを追求するのなら経済的には非合理性におちいります。また「利他主義」を唱えねば人類社会はダメージをうけます。これも最大利潤を追求する近代合理主義を超えたものかもしれません。あるいはメタ合理主義と呼んでもよいのかもしれません。

そのようなことをあれこれ考えさせる刺激的な本が、見田宗介氏の『現代社会はどこに向かうか』です。

4. まとめ

今回のコロナ騒動を契機にして何冊かの本を紹介しながら、一緒に私自身も学ばさせていただきました。

その時、これは大事だと感じたこと、普段から考えていたことでより確信がつかめたことを箇条書きにして「まとめ」にしたいと思います。やはり現代社会は歴史的に「分散とネットワーク化」に進んでおり、パンデミックのような非常事態はその変化を加速すること。

- (1) 科学的なデータに基づく政策を行わせることの重要性
- (2) 歴史に学ぶことの重要性
- (3) 個人個人が学ぶことで時代変化の方向を先取りすることの重要性
- (4) 「利他主義」という周囲の人への思いやり

紹介した本とその他の参考書

- * 村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる』2020年7月、岩波新書
- * 石弘之『感染症の世界史』2018年1月、角川ソフィア文庫
- * 落合陽一『日本進化論』2019年1月、SB新
- * 見田宗介『現代社会はどこに向かうか』2018年6月、岩波新書
- * N H K放送文化研究所『日本人の意識』調査

西池氏裕氏略歴

1944年生	
1974年4月	川崎製鉄入社技術研究所
2000年～2004年	東京大学先端科学技術センター客員研究員
2006年4月	財団法人徳島経済研究所技術顧問(現)
2007年8月	徳島県経済成長戦略アドバイザー(兼)
2008年～	ひまわり俳句会主宰
2011年9月	徳島県教育委員長(～2012年8月)